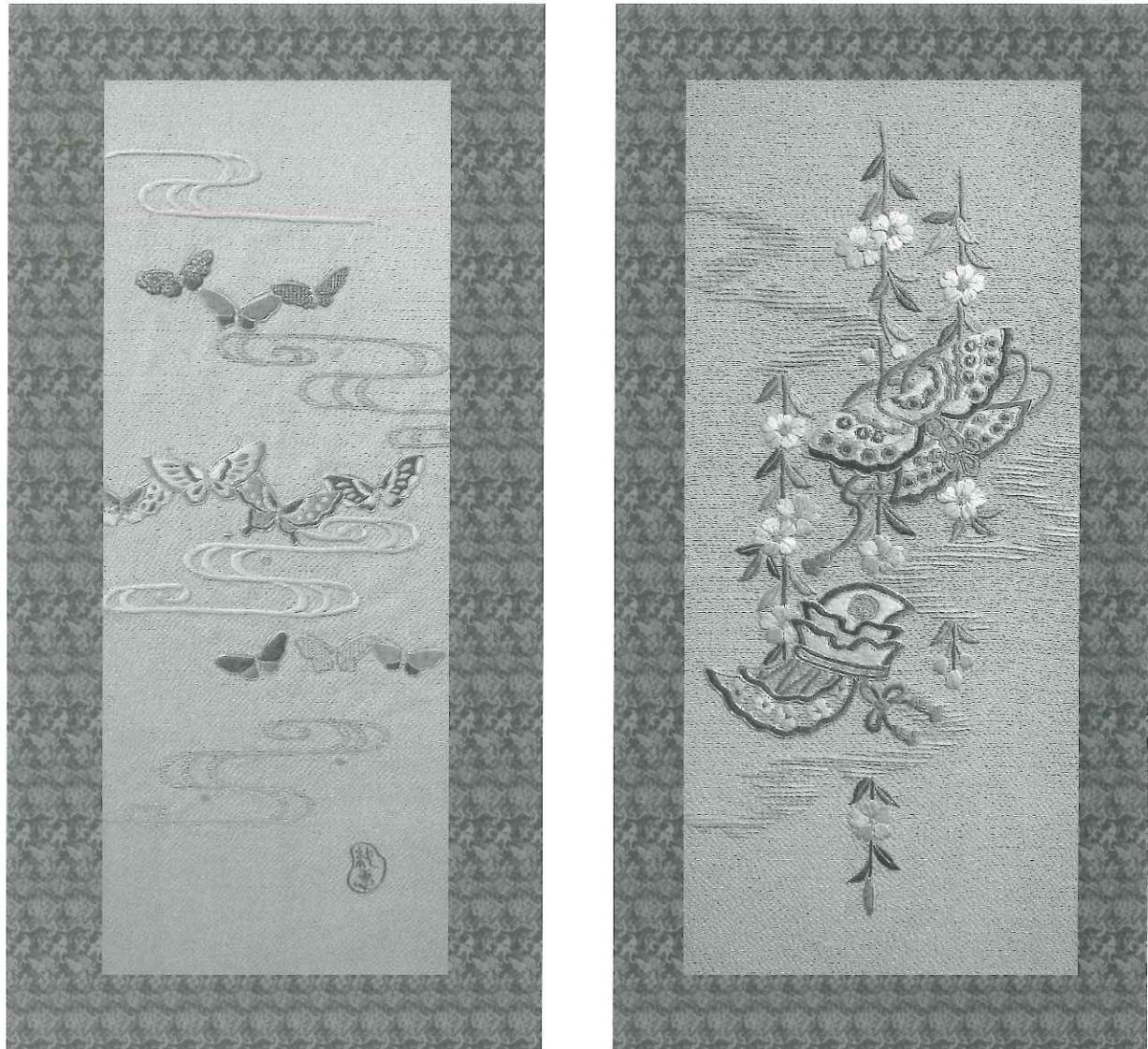


藤並の森

Vol.32

高知県立  
文学館



「寄贈記念 宮尾登美子」展より：長艸敏明作「刺繡屏風」（部分）

## リレー随筆③ 宮尾さんと新作「錦」——下川 雅枝

「中央公論」誌上（二〇〇六年五月号から）で始まった。昨年NHKで放映された「義経」の原作「宮尾本平家物語」が「週刊朝日」で連載を終えたのが二〇〇三年だったから、三年ぶりの長編執筆ということになる。

今から二十数年前、私は中央公論社の編集者として初めて宮尾さんにお目にかかった。「鬼龍院花子の生涯」「陽暉樓」などの作品が映画化され、華やかな注目を集めている最中だったが、打合せの場ではとても気さくに応じてくださった。以来、担当編集者としてエッセー集、対談集、文庫とたくさん仕事をさせていただいている。

中央公論新社と宮尾さんとの縁は深い。一九六二年「連」によって婦人公論新人賞を受賞されたことが作家への第一歩である。当時は応募原稿による新人賞はごくわずかで、受賞決定から授賞式までは「天にも昇る心地だつた」そうだ。これを契機に本格的な執筆活動を目指して上京されたものの、持ち込んだ原稿は次々に出版社に断られ、作家への道を断念するところまで追い詰められたという。

最後に高知を舞台にご自身の出自を描くと覚悟を決めて書かれた「櫂」によつて、七三年太宰治賞を受賞。以後、七七年「寒椿」で直木賞と、「一絃の琴」で直木賞と、一気にベス

中左谷謙耕と高尾さんとの縁は深い。一九六二年「連」によつて婦人公論新人賞を受賞されたことが作家への第一歩である。当時は応募原稿による新人賞はごくわずかで、受賞決定から授賞式までは「天にも昇る心地だった」そうだ。これを契機に本格的な執筆活動を目指して上京されたものの、持ち込んだ原稿は次々に出版社に断られ、作家への道を断念するところまで追い詰められたという。

最後に高知を舞台に自身の出自を描くと悟悟を決めて書かれた「櫂」によつて、七三年太宰治賞を受賞。以後、七七年「寒椿」で直木賞と、「一絃の琴」で直木賞と、一気にベス・トセラー作家への道を駆け上られるこ

原作「宮尾本平家物語」が「週刊朝日」で連載を終えたのが二〇〇三年だったから、三年ぶりの長編執筆ということになる。

今から二十数年前、私は中央公論社の編集者として初めて宮尾さんにお目にかかった。「鬼龍院花子の生涯」「陽暉樓」などの作品が映画化され、華やかな注目を集めている最中だったが、打合わせの場ではとても気さくに応じてくださった。以来、担当編集者としてエッセー集、対談集、文庫とたくさん仕事をさせていただいている。

織物の創業者、龍村平蔵の一代記である。一八七六(明治九年)大阪船場に生まれた平蔵は、一九六二(昭和三七年)八十六歳で亡くなるまで、文字通り織物を極めるための一生だった。

錦とは本来、古代中国の高級織物を指す。正倉院夢殿の厨子に掛けられた錦の一部を見る機会を得た平蔵は、その美しさに感動し、復元を決意する。養蚕から絹糸の染め、織りと古の技法を徹底的に研究し尽くし、辛苦の拳勾、ついに錦の復元に成功する。以来、秩父宮<sup>ご</sup>成婚を祝うタピストリーの製作等々、近代日本織物史上、輝ける足跡を残し、一九五六(昭和三〇)年には芸術院恩賜賞を受賞している。

宮尾さんが平蔵をモデルにした小説を構想されてから、実に三十年近くが経つた。この間、京都、大阪を中心として関係者へのインタビュー、織物の製作現場の見学、資料の読み込み等々、時を重ねて精力的な取材活動を続けてこられた。

着物や帯などの織物に大変造詣の深い宮尾さんならではの視点から、織物に生涯をかけた平蔵と彼をとりまく人々とが華麗に紡ぎだされるはずである。

今年、宮尾さんは八十歳を迎える。この節目の年に、新たにスタートする壮大な物語世界を楽しみに、期待と緊張の日々である。

(中央公論新社アドバイザー)

## ◆企画展紹介◆

# 「寄贈記念 宮尾登美子」展

（宮尾先生 ありがとう）

昨年の暮れ、高知県立文学館では、高知出身の直木賞作家宮尾登美子先生から六百点を超える資料をご寄贈いただきました。

そこで、今年の一月から寄贈いただ

きました資料により「宮尾登美子の世界」第一弾として「宮尾本 平家物語」から「義経」へ「宮尾文学における華麗なる女性たち」、第二弾として「直木賞受賞作『一弦の琴』と女流文壇賞受賞作『寒椿』」の企画展を開催してきました。

今回の展覧会は「寄贈記念 宮尾登美子展」へ宮尾先生ありがとうございましたと題しまして、寄贈いただいた直筆原稿や創作資料、愛用品などの中から、文壇の第一線で活躍する宮尾登美子先生の作家としての軌跡と、珠玉の作品群をご紹介しています。

第一部「作家への道のり」のコーナーでは、三十七歳の時、中央公論女流新人賞を受賞し、直木賞の候補にもあがつた「連」を中心に紹介。この作品のもとに「真珠」の原稿や、作家として脚光を浴びる以前の習作原稿などを多数展示しています。

この頃の作品には「おうま練乱」「貧乏感概」「珊瑚影り師」「五台山」テレビドラマ「賤機帶」など、土佐を舞台として書かれたものが多く見られ、小説、エッセイ、テレビドラマと様々な分野に挑戦しています。保育所や社会福祉協議会に勤めながら執筆された

もので、原稿には前田とみ子の名が記されています。これらの作品群から、土佐という一地方の柵より、出ることのできないもどかしさを感じながら、執筆を続いている当時の様子が窺えます。



宮尾登美子 印章

第三部「珠玉の作品群」のコーナーでは、直木賞候補にあがつた「陽輝楼」や宮尾作品ではじめて映画化され、「なめたらいいかんぜよ」というせりふで躍有名になった「鬼龍院花子の生涯」。徳島県の剣山の麓にある剣神社の境内に「さわやかな月光の花は凜として高い」と先生の美しい字で書かれた碑が建立されている「天涯の花」。今回、初公開の原稿が展示された「天璋院雛姫」や「きのね」。単行本、文庫本で百万部以上の大ベストセラーとなり、中公文庫からは大入り袋が配られ、舞台、映画とも好評を博した「藏」。吉川英治賞を受賞しながらも純文学としても評価の高い「序の舞」。その他にも「松風の家」「伽羅の香」などの大作をご紹介しています。

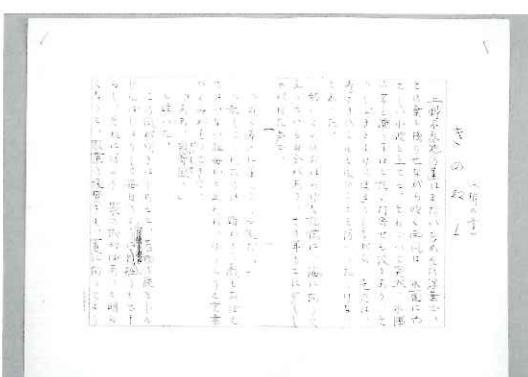
第四部 大作「宮尾本 平家物語」のコーナーでは「宮尾本 平家物語」の原稿三六一八枚や、「義経」の原稿三一枚、「宮尾本 平家物語」の執



翻訳本の数々「櫂」「寒椿」「藏」の中国語版、「クレオパトラ」韓国語版

第二部「自伝的作品四部作」のコーナーでは、太宰治賞を受賞した「櫂」をはじめ、「春燈」「朱夏」「仁淀川」をご紹介しています。

宮尾先生をモデルにした「綾子」二十六歳までの、波乱の人生が描かれており、分身の「綾子」を通して、その半生を赤裸々に描くことにより、先生は文壇に迎え入れられました。宮尾文学の原点がここにあります。



初公開の「きのね」の原稿 1318枚

筆を促した、厳島神社に奉納される「平家納経」の複製なども展示しています。

今回、寄贈いただいた資料の中では、この『宮尾本 平家物語』に関するものが最も充実していました。五年間をかけて執筆されたご苦労の後が偲ばれる資料群です。

また、二階のロビーでは『クレオパトラ』の装丁原画などを紹介していますが、これは、本年一月に姉妹館協定を結びました北海道伊達市の「宮尾登美子文学記念館」から借用しました。北海道伊達市に住む宮尾先生のファンの方が購入し、記念館に寄贈されたもので、会場に華やかな雰囲気をかもしだしています。

その隣の第六部「人々との交流」のコーナーでは、宮尾先生に送られた書簡類の数々を紹介しています。「吉行淳之介」「水上勉」「宇野千代」「津村節子」「杉本苑子」「丹羽文雄」「阿川弘之」「坂東真砂子」といった作家や「壇ふみ」「松坂慶子」「八千草薫」「緒形拳」「仲代達矢」といった俳優からの書簡が交友の広さを物語っています。

## 展示構成

### 主な展示資料

#### I) 作家への道のり

原稿類及び創作資料  
(初公開資料多数)

#### II) 自伝的作品四部作

珠玉の作品群

#### III) 直木賞受賞「一絃の琴」 (2階常設展示室)

#### IV) 大作 宮尾本「平家物語」 宮尾先生の愛蔵品、愛しき小箱たち

#### V) 直木賞受賞「一絃の琴」 (2階常設展示室)

#### VI) 宮尾先生の愛蔵品、愛しき小箱たち

#### VII) 人々との交流

### 関連企画

#### 「琵琶と語り」を楽しもう (「宮尾本 平家物語の世界」)

日本でただ1人「宮尾本平家物語」の演奏を許可された、日本音楽集団、筑前琵琶奏者・田原順子氏の朗読と琵琶の弾き語り

日時 4月30日(日)午後2時～3時

場所 高知県立文学館2階ロビー

参加 展覧会観覧券が必要です

## ☆お楽しみ抽選☆

～宮尾先生からのプレゼントです～

展覧会担当学芸員による展示解説をおこないます。

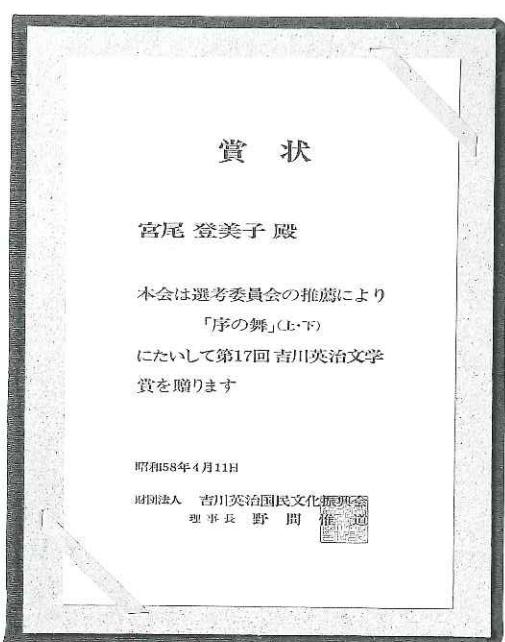
日時 5月13日(土)

場所 午後1時～(40分程度)

参加 展覧会観覧券が必要です

展覧会をじらんになられた方に抽選で宮尾登美子作『松風の家』単行本上下巻をプレゼントいたします。

今回は、一階と二階の四ヵ所を使い、宮尾先生のすべてをご紹介いたしておりますので、ごゆっくりご観覧いただければ幸いです。



第17回吉川英治賞の賞状「序の舞」で受賞

吉川英治賞の賞状、「きのね」「天璋院篤姫」等初公開の原稿、エランドール特別賞の賞状、水上勉、吉行淳之介他書簡他

## 学芸員メモ

## 岡田憲佳写真展「万葉の動植物たち」を終えて



## 高知と万葉集

高知の文学との関わりを言えば、江戸後期の土佐の国学者・鹿持雅澄（一七九一～一八五八）が万葉集を長年にわたり研究し、注釈書「萬葉集古義」という大著を残したことが挙げられます。雅澄は歌人としても万葉調の和歌を詠み、化政文化期の土佐の歌壇に大きな足跡を残しました。

歌人としても万葉調の和歌を詠み、化政文化期の土佐の歌壇に大きな足跡を残しました。雅澄は歌人としても万葉調の和歌を詠み、化政文化期の土佐の歌壇に大きな足跡を残しました。

歌人としても万葉調の和歌を詠み、化政文化期の土佐の歌壇に大きな足跡を残しました。

寄せられた短歌は、土佐弁ならではの表現で思つたことや感じたことが素直に詠まれおり、お客様も声に出して読んで楽しめている様子でした。

土佐弁の文学には、江戸時代に始まった土佐狂句「テニハ」という狂句がありましたが、開祖の川村一瓢が、九代藩主豊雍の茶坊主だったことから豊雍も土佐狂句「テニハ」の句を作っています。

また機会があれば、土佐弁で文学を楽しむ企画を考えてみたいと思います。

## 文字展は疲れる？

さて、展覧会は写真に万葉集の歌とその歌意を添えて開幕いたしましたが、「和歌や動植物の解説が欲しい」という要望から、解説付きのキャプションを作ることになりました。会期後半は解説付きキャプションを添えた展示に切り替えました。

キャプションという言葉は、耳慣れな

## 土佐弁の歌

万葉集卷十四の東歌と卷二十の防人歌には、その当時の方言で詠まれた歌が沢山あります。今回の展覧会関連企画として、土佐弁で短歌を詠んだものを公募しました。

い言葉かもしだれませんが、展示コーナー毎の見出しや、展示品の名札、説明文のことです。

解説キャプションは、あまり長い文章だと読むお客様がお疲れになるだろうと、歌も含めて四百字以内に収めたものを作成いたしました。しかし、出品点数が五点ですので、合計すると二万字を超える。それの解説はかなり短くしたもの、通して読むとちょっとした小説を読んだのと同じくらいの文字量です。

文学の展示は、見ることより読むことが多いくなってしまい、疲れるという声をお客様からいただくことがあります。疲れない展示には、まだ工夫が必要だと思います。この展覧会終了後に参加した全国文学館協議会の展示に関する共同討議でも、キャプションの文字数や文字の大きさが話し合われました。参考を持ち寄つての討議でしたが、展示室の構造や照度、展示資料とのバランスなど様々な条件がからむことから、改めてキャプション作成の難しさを痛感いたしました。

（学芸課／川島郁子）

## 石上乙麻呂卿の土佐の国に配えし時の歌

石上 布留の命は 手弱女の 惑ひによりて

馬じもの 繩取り付け 肉じもの 弓矢囲みて  
大君の 命畏み 天離る 鄙辺に罷る  
古衣 真土山より 帰り来ぬかも

## 【歌意】

石上布留の殿様はかわいい娘の色香に迷つたために、馬の様に繩をかけられ、猪の様に弓矢で閉まれ、天皇の仰せをおそれ遠い田舎に下つてゆく。古い衣を打つという真土山から都へ帰つては来ないものだろうか。

（万葉集卷六・一〇一九）

展覧会は、万葉集に詠まれた植物や動物の写真によって和歌の世界に親しんでいただきたいと企画したものでした。岡田憲佳氏の写真展は二〇〇四年に「金子みすゞ—思い花」展を開催して以来、今回二回目の展覧会となります。

岡田憲佳氏の写真展は二〇〇四年に「金子みすゞ—思い花」展を開催して以来、今回二回目の展覧会となります。

日本最古の漢詩集「懷風藻」では「地望精華（家柄が良く）、人才穎秀（才能があり）、雍容問雅（溫和で雅やかで）、甚だ風儀に善し（とても容姿がよい）」と石上乙麻呂を賞賛し、乙麻呂が土佐で流され、二年半を過ごしたと伝えられています。

武天皇代に活躍した官人ですが、七三九年、久米連若元と姦通した罪により土佐に流され、二年半を過ごしたと伝えられています。

石上乙麻呂は、聖佐に流される様子を都から順番に歌物語風に詠んだ長歌があります。

万葉集四五〇〇余首の歌には、植物が約一六〇種類、動物が約九〇種類も登場し、岡田氏が出版された「万葉花」植物編、動物・風月編二冊には、三〇〇首近い和歌が紹介されています。展覧会では展示室の広さに合わせて作品五五点を展示。和歌の内容や季節感などを考えながら構成しましたが、万葉集全体で考えるときわずか1%ほどの和歌を紹介したに過ぎません。展示してみて万葉集の深さを感じています。

## 宮尾さん、ありがとう

自筆原稿や愛蔵品など六百点を超える資料を当館に寄贈してくださった宮尾登美子氏に高知県から感謝状が贈られました。感謝状は、当館館長と担当学芸員が三月二十日に宮尾氏のご自宅を訪ね、お渡してまいりました。



感謝状を受け取る宮尾登美子氏

宮尾氏は、新聞社の取材に「自分が愛したもの引き受けてくれる場所ができる安堵しています。皆さん大事にしていただければうれしい」(高知新聞三月二一日朝刊)と話され、当館としても嬉しいコメントとなりました。

資料は、昨年、十一月に寄贈を受け、整理をすすめおりましたが、現在開催中の寄贈記念展で約二百点をお披露目しています。

当館では、宮尾登美子氏の作家としての軌跡をたどることで、きる資料群をもとに、今一月から十二月まで五回にわけて、テーマ展を開催してまいります。

また、姉妹館提携をした北海道の宮尾登美子文学記念館との相互協力として資料の貸借など積極的にすすめてゆく予定です。

約2ヶ月毎に展示がかわりますので、ご来館の折りは、どうぞ、ご高覧ください。

## 文学館の経費削減と無料化

館長 前田英博

平成十八年四月一日から、高知県立文学館もいよいよ指定管理者制が導入されることとなつた。指定管理者になると執務は代行管理料の中で賄うこととなり、赤字のリスクは指定管理者が負担することとなるため、当然その対応策としては、「出を制して、入を図る。」こととなる。文学館は県立のため、これまで、高知県に準じて一定額以下の物品購入や

板の制作は、地方自治法や県の条例・規則に沿つて単独業者と随意契約をしてても特に問題はないと考えたが、四月一日からは事務の効率性は考えたうえで、加えて一円でも安く買えることを考えた取り組みをしていく必要がある。当然のことながら、人件費といえども聖域ではなく可能な限り見直しを行い、必要最小限の職員で運営することなど「出を制する」ための措置を講ずることが必要となる。

一方、「入を図る」ために知名度の高い巡回展を行うことや展示を頻繁にリピュールを行うなど様々な方法により観覧者の増員を図るなどこれまで以上の努力が必要となる。

このような時代の中、一見時代逆行して見える「博物館等の無料化」が話題となっている。

都市部の大きな博物館は別として、地方の小さな文学館の年間の有料入館者数は、一万～二万人で入館料収入も少額であるため、入館料徴収のために必要な人件費などを削減すると、無料化しても大きなマイナスとはならず、かえって「入場料はただ!」という宣伝効果の方がプラスに作用すると言うのが無料化の考え方である。

文学館は県民のための「公の施設」として設置されたものであり、「受益者も相応の負担をするべきである。」と言う意見や、「職員の減により入館者に対するサービスが低下する。」と言う意見なども踏まえ、今後十分に議論し対応していくと思ふ。

## 高知県立文学館 紙芝居創作講座

「紙しばいを作ろう！演じよう！」報告

手作り紙芝居発表会！

平成18年5月21日(日)



手作り紙芝居発表会！

平成18年5月21日(日)

できたよーほくのわたしの紙芝居!!

できましたよーほくのわたしの紙芝居!!

講座では、土佐みんわ語り部の市原麟一郎先生とイラストレーターの藤本知子先生の指導を受け、紙芝居の基礎と実技を学び、34名の参加者は熱心にメモをとり、世界にひとつしかない、オリジナル紙芝居を一場面完成させました。

それぞれ家に持ち帰り、オリジナル紙芝居の続きを

制作中の皆さんの作品は、来る5月21日(日)に文学館ホールにて午後1時半から発表されます。

また、オリジナル紙芝居をお持ちの方の紙芝居発表会への参加も募集しています。

オーリジナル紙芝居をお持ちの方で参加を希望される方は講座に参加されていなかつた方でも無料で参加できますので、紙芝居公演の希望者は前日までに電話かハガキ、FAXにて文学館までご連絡ください。

(鑑賞も無料です)

土佐文学さんぽ

30

文学碑のならぶ公園

植村浩詩碑など

猪野睦

久しぶりに桜の散っている高知城西公園の桜馬場通りを歩いた。かつての広い高知刑務所跡と、江ノ口川を挟んだここも公園になつて二〇年近くたつたろうか。樹木も伸びそれが北詰まで続き、静閑な手入れのゆきとどいた緑地公園になつていた。そしてここに文学碑通りと呼ぶにふさわしい場になつていた。いく文学碑通りと呼ぶにふさわしい場になつていた。いかの散策者とゆき合つた。

あるが、当時日本の領事館があり、そこへ抗日ゲリラの武装焼打ちなどが起っていた。それと連帶していく詩であった。

▼壺発行所・「(句集)繭の絲 山岡  
みよ 壺発行所」他▼林嗣夫〔(定  
本)学校 林嗣夫著刊〕他▼沢田明  
子・書跡「おりふしに―明子の句(折  
帖)」▼小松弘愛・「詩と思想・詩人集  
2005年 詩と思想編集委員会  
編 土曜美術社出版販売」他▼野本  
幸雄・「(歌集)アルノの朝 野本幸  
雄 短歌新聞社」▼橋本嘉子・「暮し  
の三占 第4号 北風(ふくい)」

楨村浩の詩碑がここに建つたのは一七年前だった。詩碑周辺のデザインは美術家の高崎元尚氏で、碑のまわりを囲んだベニカナメモチの紅色の新芽があざやかだった。そのなかに楨村浩の詩「間島バルチザンの歌」の冒頭を刻みこんだ碑が呼びかけるようにあった。

馬場緑地公園内に移転建立することができた。戦前から追われ続けた楨村浩が市民権を得て市民のふところに帰ってきた碑だった。

その詩碑のわきの解説碑には次の文字が刻まれた。

「革命詩人楨村浩 一九一二年、高知市生まれ、本名

高知市廿代町にうまれ、神童とはやされた少年田畠豊道はのちの楳村浩であるが、小学四年のとき、英才教育で知られる土佐中学へ二年とびで入学、あと軍人教育で知られる海南学校へ転校、そこで軍事教練反対

吉田豊道、「間島バルチサンの歌」その他の反戦歌に  
よつて中国侵略戦争を鋭く告発。一九三二年捕えられ  
て高知刑務所に入獄するが、天皇制特高警察の野蛮な  
拷問がもとで一九三八年、二六歳で病没した』。

レタリア作家同盟高知支部結成のメンバーとなり翌一九三二年、高知朝倉第四四連隊の上海出兵反対、反戦運動の中心者となつた。三三年四月一斉検挙、高知刑務所へ投獄、三五年出獄、三八年土佐脳病院で没した。世が暗い戦争へむかう時代、反戦運動に加わり、反戦詩を書きのこしてかけぬけた。はげしい二六歳の生涯だった。

その翌年の六月四日には奥見孤蝶合碑が刻まれた。高さ一メートル近い青緑片岩で孤蝶の白筆短冊から写した句「鯨去る行方を灘の霞かな」が刻み込まれた。そして続けて六月には竹本源治の「戦死せる教え子よ」を刻んだ詩碑が建ち、十月には高知ベンクラブ創立二〇周年を記念した紅簾石の寺田寅彦文学碑も建つた。寺田寅彦の隨筆「花物語」の冒頭の「昼顔」が刻みこまれた。それに日中不再戦の大きな碑も建ち、刻みこまれた。それに日中不再戦の大きな碑も建ち、

戦時下は忘れられ、戦後になつて反戦革命の詩人として評価が高まり、多くのアンソロジーに詩が収録された。別冊「太陽」でも「近代詩人百人」の一人として知られた。詩碑に刻まれた「間島パルチザンの歌」は「生ける銃架」とともに代表作であるが、いずれも満州事変の本質をえぐる詩であつた。

高知文学碑通りにふさわしい場となつた。  
　　楨村浩詩碑の道をへだてた向いには、植木枝盛旧邸の  
一部もあり、来高する文学愛好者を案内する格好の  
場になつてゐる。すこし足をのばせば寺田寅彦記念館、  
高知県立文学館も近い。二年後には楨村浩没後七〇年  
がくる。ここをゆづくりめぐるのも、高知の文学の  
再発見ではあるまいか。



「黒岩涙香遺品KODAKカメラ」

◆◆◆ 文學館日誌 2005年12月～2006年3月 ◆◆◆

◆1日 消防訓練。◆6日 宮尾寄贈資料到着。◆10日 対談「坂東眞砂子さん、文学のこときかせて」企画展示室で午後2時、午後3時半。川島郁子主任芸員との対談と質疑応答。参加者78名。新刊『梶首の島』のサイン会も。◆17日 「平城山」の歌人北見志保子没後50年展開幕(1／29まで)。オープニング記念・川田弘人「平城山」歌唱。伴奏：西岡利恵。午前10時)。参加者33名。北見志保子展示解説26名。(第68回朗読の会。高知城ホール2階。午後2時)午後4時。「四つのちょっといい話」(もちもちの会)参加者27名。◆18日 北見志保子展示解説26名。◆25日 大橋芳子氏来館 黒岩涙香遺品の寄贈。大正8年の海外旅行時、アメリカで買い涙香自身も愛用したカラーラ、長女のそ免子さんにみやげとして持ち帰った小型コンパクトや時計の寄贈申し出を受ける。(なお、これらの遺品は2月より常設展示室の黒岩涙香コーナーに展示) ◆26日 年末年始休館。(12／26～1／1まで)

見志保子の歌20首」。第2部 志保子の時代小説「千里姫」。参加者44名。◆23日 横浜市より須藤哲生氏来館。志保子の書簡コピーをお持ち下さる。◆25日 雋川高校元生徒会長で大阪市在住の市川寛城氏ら観覧。また志保子歌碑建碑に尽力された澤田清氏長女東野みよ子氏来館。河上迅彦氏観覧。◆26日 「北見志保子没後50年展」冊子改訂版発行。◆28日 元須崎高校教諭で北見志保子作詩の校歌をピアノで初演された真鍋伝一氏観覧。◆29日 北見志保子展終了。志保子展の総観覧者1404名。

試行錯誤」。参加者35名。／岡田憲佳氏、高知県へ寄贈された宮尾登美子氏に知事感謝状を前田館長からお渡しする。◆21日「万葉の動植物たち」展閉幕。総観覧者182名。◆23日「作家の肉声を聴く」田宮虎彦・タカクラ・テル「文学館ホルル」。田宮虎彦「わが文学のふるさと」一九八〇年録画。田宮68歳の映像と一九八四年タカラ・テル93歳の声録音を聴く。参加者約30名。◆25・26日「紙芝居創作講座」「紙しばいを作ろう！演じよう！」を文学館ホールで開講。講師市原麟一郎氏。参加者34名。

がけ、「萬朝報」を創刊した明治の新聞王であり、我が國探偵小説の元祖ともいわれる安芸市出身の黒岩潤香の企画展を契機として、ご遺族（令孫）から寄贈頂きました。これらは涙香が大正八（一九一九年）、パリで行われた連合国とドイツの講和条約の使節に同行した時の土産品です。カメラはアメリカで買い求め実際に愛用したもので、極めて貴重な涙香の遺品です。

人事異動

新所屬

15

旧所屬

高田興之助

高知県文化財課長（文学館）

卷之三

県立山田高校教諭

縣立山田高級教諭

卷之三

卷五

文學編制篇長

文学館副館長  
(高知県国際文)

文学館主查  
(県立四万十高)

文淵閣三五

卷之三

卷之三

# 高知県立文学館カレンダー

2006年  
4～6月

4月—April

## 寄贈記念 宮尾登美子展 ～宮尾先生 ありがとう～

平成18年4月8日(土)～5月17日(水)  
(※休館日なし)

観覧料:一般350(280)円

午前9時～午後5時半(最終入館は5時まで)

昨年12月、高知県立文学館では、  
高知出身の直木賞作家  
宮尾登美子さんから600点を  
超える資料をご寄贈いただきました。  
今回の展覧会では、  
寄贈いただいた直筆原稿や  
創作資料、愛用品などの中から  
厳選した約200点を展示します。



★期間中来館された方の中から、抽選で  
宮尾先生の著作本をプレゼントします。

### 関連企画

#### 「琵琶と語り」を楽しもう ～「宮尾本 平家物語」の世界～

宮尾先生がただ一人「宮尾本 平家物語」の演奏を許可された日本音楽集団、筑前琵琶奏者 田原順子氏の朗読と琵琶の弾き語り。



4月30日(日) 午後2時～3時  
※文学館2階ロビーに  
お集まり下さい。  
(観覧チケット必要)

### 展示解説

担当学芸員による展示  
解説を40分程行います。  
5月13日(土) 午後1時～  
(観覧チケット必要)

休館日：年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。ただし、7月1日～14日、9月1日～14日は「山内一豊とその妻」展のため臨時休館します。

#### 利用案内【4月～6月】

開館時間 午前9時～午後5時30分(入館は、午後5時まで)

休館日 なし

観覧料 一般350円

特別企画展のあるときは、料金が変わります。(上記参照)  
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳所持者とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、閲覧室、茶室「慶雲庵」

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

5月—May

6月—June

## 土佐の高知の文学探訪展

平成18年5月25日(木)～6月30日(金)

(※休館日なし)

観覧料:一般400(320)円

高知が舞台となったり、高知ゆかりの人物が主人公になった文学は数多くあります。こうした「高知」をテーマとした文学にスポットをあて、また、文学館から歩いて行ける高知城周辺の文学碑など、文学者と縁の深い場所の紹介もいたします。



はじめての

### ●文学館 朗読講座 ●

#### 朗読を楽しもう。～楽しく役立つ朗読～

文学館では、皆様よりご希望の多かった、朗読講座を開催します。朗読は、コミュニケーションの基本です。発声、発音から表現まで、朗読の楽しさを実感してみませんか。

#### ☆今回は初心者の方が対象です☆

■1回目 4月15日(土) 午後1時～4時  
「～扉を開け 続了しまし～」講師:野中久美子さん

■2回目 5月20日(土) 午後2時～4時  
「朗読のポイント」講師:松田光代さん  
場所:文学館1階ホール

■3回目 6月17日(土) 午後2時～4時  
「朗読の立体化」講師:松田光代さん  
場所:高知城ホール2階  
受講料:無料



まだ余裕がございます。  
受講をご希望の方はお電話で  
文学館までお問い合わせください。

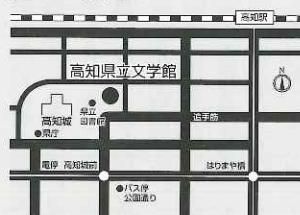


## 「尚武・武道の世界—土佐藩主山内家の名宝展Ⅲ」

文学館2階 企画展示室にて開催中 ※4月29日(土)～6月27日(火)まで

観覧料:一般400円 高校生以下無料 ※文学館入館料とは異なります

#### 交通のご案内



- 高知駅より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立  
文学館

高知市丸ノ内1丁目1-20  
電話 088-822-0231  
FAX 088-871-7857  
〒780-0850